

体 験 記

栃木県 野 沢 芳 夫

略 歴

本籍地 栃木県那賀郡絹村（現小山市）大字
福良

生年月日 大正十三（一九二四）年四月十日

経 過 事 項

昭和六（一九三一）年四月一日 絹尋常高等小

学校尋常科一年入学

昭和十二年三月二十五日 同右 尋常科六年卒

業

同年四月一日 絹尋常高等小学校高等科一学年

入学

昭和十四年三月二十五日 同右高等科卒業

同年四月一日 茨城県立結城農学校入学

昭和十六年十二月二十五日 茨城県立結城農学

校繰り上げ卒業

昭和十七年四月二日 東京都北多摩郡小平村

陸軍經理学校勤務

昭和十九年九月二十日 北支那派遣軍 宇都宮

東部三六部隊入隊

同年十月五日 漢北省琢県第六三師団七六旅団

独立歩兵第二五大隊入隊 通称陣第四二八六

部隊

昭和二十年一月三日 華北省高碑店において幹

部教育及び警備討伐に参加

同年二月 陣第四二八六部隊より漢北省豊台旅

団司令部士官教育のため派遣

同年二月 旅団討伐のため、鎮辺城攻略戦に参

加

同年三月 漢北省台旅団司令部より満州通遼に

て幹部教育

同年六月 満州牡丹江省、寧安県臥竜村石頭、

満州第一三九八一部隊 関東軍石頭予備士官

学校第十三期生

同年八月 ソ連軍侵攻による戦闘に参加する

行動日程

八月 午後四時出陣式 土道神社参拝

藤河先遣部隊 雨の中一文字山陣地に向け出発

十二日午後三時 岩崎中尉外十人、石頭校舍焼却のため出発 時には多数の決死隊員が、一文字山付近で日本軍の反撃に出た。地雷や手榴弾を身に付けて、生い茂った草の中をはい回りソ連戦車の下に飛び込んでこれを爆破した。

特に石頭にあった予備士官の十三期生により編成された特設荒木歩兵連隊の麾下の第一大隊（猪股繁策大尉）のソ連軍の重戦車を相手に肉薄攻撃があった。小銃射撃、手榴弾投擲、重機迫撃砲にて肉攻を繰り返した。敵戦車は日本の吸着爆雷の爆発音に驚き急停車して、搭乗員が戦車を捨てて満人部落に逃げて行った。梅津中尉は戦車を分捕り、沈着な行動により弾は一発必中、たちまち五〇六台を擱座させた。いっときは後退、ソ連の侵入をいっとき完全に阻止した。

また学校の偶数中隊は一文字山溢路口において、

若槻中尉は代馬溝にてソ連機甲団の前線基地の先制攻撃を行うべく陣地を出発、十三日払暁奇襲を敢行す。磨刀石の戦闘にて我々石頭十三期生奇数中隊は、戦死者約八百六十人。

戦後復員船の着くたびに、舞鶴の岸壁で還らぬ息子を求めて立ち尽くす老母の姿を多くの人が見ている。歌やドラマにもなった岸壁の母、端野いせの一人息子 新二軍曹もこの猪股大隊の玉碎組の一員であった。

満州の奥深く百二十〇百五十キロも突き進み、東部戦線は国境に取り残され、虎頭要塞の第十五国境守備隊将兵は悪戦苦闘させられた。以上のよううに八月十三日は部隊の半数が磨刀石で、ソ連戦車部隊と激戦の末に、約八百六十人の命を落した当日である。

戦後六十数余年の間、靖国神社の社頭に相集い、戦闘で亡くなった人々と静かに向かい合い鎮魂の参拝を続けてきた。我々も八十有歳になり、神社に参拝も出来なくなる者が多数おりますため、献

木または提灯奉納、神楽の永久奉納などで戦友を慰めている。健全なる者は、昇殿参拝を続けております。

終戦の詔勅は全く聞いていない。日時は定かでないが、ソ連のジープ四〜五台がアルシャン部落に到着、東沙河沿にて、伊藤少佐より停戦が発表される。武装解除、敦化に到着するまでに弾薬を置いて行け。また銃を次の部落で置いて来たが、天皇陛下より拝受した物であるから、敵に渡す前に手入れをしておくようにとの事で、人に笑われないようにした。当初は負けるなんて考えた事もなかった。

敦化、砂河沿、南湖頭、隘路口、寧安などに露営をしながら三十日愛河戦車第五連隊跡に到着。

抑留生活に入る

ソ連にダモイ、ダモイと騙されて上下二段の有蓋貨車に乗り込んだ。ナホトカカウラジオオストクに行く、そうすれば日本に帰れる。ソ連兵はそう言っていた。だからその言葉を信じ仲間と乗り込

んだ。昭和二十年十一月の事であった。

少ない荷物を抱え夏の軍服のまま乗り込んだ。窓もなく、三十〜四十人でぎゅうぎゅう詰めた。故郷に帰れるという嬉しさからか、ろくに食べてもいないのに車内は穏やかな雰囲気だった。だが鉄橋に差し掛かり、アムール川を越えたのが分かると、車内の様子は変わった。ざわめき始めた。どこへ行くんだらう。川を越えて北へ行く銃殺されると聞かされていたから、故郷へ帰れるという思いは消えた。どこで何されるか分からない。いつ帰れる？ と不安だけが残った。

食事や用を足すため、列車が停車すると隙を見て逃げ出そうとする仲間もいた。捕まった仲間はソ連兵に脇を抱えられ、列車から離れて行く、そして後方から銃を向けられた。見せしめだったんだらう。皆の見える前で射殺された。車内はそれから無言になった。

列車を降り、トラックに乗せられ着いた場所はナホトカでもウラジオオストクでもない、雪で真っ

白な原野、絶え間なく細かい雪が降り続く場所、シベリアだった。冬になると氷点下四〇度にも六〇度にもなる世界。トラック二台分の材木を切り出し丸太小屋の収容所を作るのが仕事だった。

飯盒に半分ほどのスープ、マツチ箱のような食パン、具合が悪く働けない者はそれさえも減らされ、その内仲間はバタバタと死んでいった。特に召集された三十五、六歳の年長者は、可哀想にみんな栄養失調であった。

いよいよシベリアの地での生活が本格的に始められた。

移動は雪のため、毎日が徒歩で往復するのであるが、靴はフェルトで出来ている。これは雪が余り付かず中に入る時は外で二、三回たたけば雪はなくなり割合に暖かいが、大きさが日本の靴の二倍くらいある。約二十五文以上と思われる。足が二本入るような大きさに歩くに歩けず、その上栄養失調であり、小さな物にでも当たれば倒れてしまう状態で、よくシベリアで過ごせたと思う。

特に白樺や五葉の松が多かったと思う。白樺は春先、芽が出る前は木に傷を付け、下に飯盒でも置けば甘い水にありつける。また五葉の松は、直径二メートルくらいあるので一本倒すと実が一俵くらいはとれる。これを火の上に円ピを乗せて焼くと実が食べられる。

特に作業は第二バム鉄道の敷設、伐採作業、切り出し、製材所で貯木または運搬、道路工事など多種にわたり行った。期間は約四年間を通じてホルモリー地区二支部、コムソモリスク地区内約十カ所の支部を回った。

昼間は作業しているので分らないが、夜になるとダニと南京虫などの攻撃を受ける。明け方になると南京虫は木目の間に入り、ダニは下着の縫い目に入り、退治するのもペーチカの煙突に縫い目を当て焼くのである。縫目は血で真っ赤に染まる。その繰り返しはシベリアの夜である。

朝起きると、真冬には零下六〇度以下になる極寒の地。一日の食事が小さなパン一片と少量のス

トプだけという生活の中で、鉄道建設のため重労働をさせられる。昼食は抜きのため、こらえきれない寒さの焚き火、生木のため燻る、渋い顔して語るのが故郷の食べ物の話。または雪の下にある若芽をかきわけて取り、空腹を満たす。

抑留地の生活は大体以上の通りであり、入浴など年一〜二回である。朝は雪で顔を洗い、毛布は作業に出る前、庭に広げて置く。雪が水分を吸収してくれるので割と暖かい。

身体検査は尻の皮を引っ張るだけで一級、二級、三級、OKが決まる。一〜二級は収容所外の作業、三級またはOKは留守で、薪割や宿舍内のドラム缶のストープが真っ赤になるまで焚き付ける。薪は全部生木である。一晩中の軽作業である。朝夕の点呼は約一時間くらいかかった。計算が出来ず何回も検査するので時間はかりが過ぎてゆく。また労役についても栄養失調の者が続出し、一日のノルマを達成しなければ食糧は少なくなるし、多くの戦友が死亡して逝った。埋葬は十人くらいで

穴掘りに行くが、土が凍土のため掘る事を断念し雪の中に裸体で埋めた記憶がある。

夏になると雪が解け、山の中が川のようになり鱒の大きいのが山で捕れる事があった。

洗脳教育は壁新聞等があった。出席しないと吊るし上げにあい、円座の中に座らされて、周りの者が罵り合い、結局は懲罰となり、飢えと寒さの重労働をさせられる。作業と民主化の教育で生死の境に立たされる。

思い出となるのは、夏は白樺の水または草葱、キノコと豊富であるが、毒キノコもあるのですが、背に腹は変えられず死者も出る。冬は松を倒して実を食するので幾らか生き延びられる。

どうにか帰されたのが二十四年の末であった。

帰国後の反省

戦争では自分の運命が個人の意志とは全く関係なく決定されてしまう。人生には苦しい事や楽しい事があるが、苦しい事もいつかは思い出になる。皆さんは青春を犠牲にした者がいた事を忘れずに、

思いやりの心で命を大切に次代を担って欲しい。

思い出

時の流れは早く、終戦後六十有余年が過ぎ、不法なシベリア抑留のごとき悲惨な事実もはるかかたに忘れられようとしている。これでは凍土に散った戦友遺族に申し訳がなく、二度と悲惨な事にならないよう念願するものです。

今や政府の要人も若返り、抑留など知らない先生方がいる事は誠に残念に思われます。

今このように生活が出来るのも我々抑留者の犠牲があつた事を忘れないで、永遠に学校教育を推進して頂きたいと思えます。

顧みますれば昭和二十年八月九日ソ連軍の参戦に遭遇して過ぐる満州での一カ月間、関東軍の命令の下、満州の荒野に生き残つた引揚者に、ソ連軍の飽くなき略奪と陵辱、現地民の襲来、内戦の弾下の希望なき日々と、つらい叫びをあげさせたのである。

こうしたことがスターリンの思う壺だった。主

力兵団は次々と防衛線を後退させるが国境付近は勇戦したがソ連軍により幾つかの防御陣を包囲され、孤立しながらも懸命に抵抗を続け、その間に開拓の家族を帰したが、その先は分からない。我々多くの決死隊は特にソ連軍の将校を目標にした。そして白刃をかざして襲撃した。時には多数の決死隊が身体に爆薬や手榴弾を結びつけ、生きた移動地雷源となった。悲劇は軍隊ばかりではなかった。公署警察など急速に機能を失った。放り出された一般居留民や開拓農家の悲劇は急速なるソ連機動部隊の進撃により予期なくされた。鉄道や自動車を利用出来ない者は退避行動に移った。実に五百キロの行程も歩き通しだった。また途中親子が必死になって歩いていた。余裕は双方になかった。まなざしで頑張れと言うのがやっとだった。一家は三十歳後半の母と、七〜八歳ぐらいと四五歳ぐらいの二人、背中には乳呑児を、それに使用人と思われる中国人の老爺だった。彼らは兵隊さん、一緒に連れて行って、とは一言も言わなか

った。そして母子五人のその後は誰も知らない。一人で生き抜かなければならない強い母には無慈悲に感じたであろう。敗戦でソ連軍の俘虜となり武装解除、武器を持たない日本人は弱いもの。銃を突きつけられ、時計、万年筆、カミソリなど、ソ連で珍しいものが見付かると取り上げられ、ソ連兵一人で腕に三個、四個の時計を付けている兵が珍しくないほどおりました。

さて終戦も「あっと」という間に、そして武装解除までの間、生死をともした難苦行の数々。今でこそなつかしい思い出として語り合えるのも――本当に目まぐるしい日夜でした。掖河における戦友の屍、目を覆うばかりの惨状、戦争というものの悲惨さは骨身にしみて感じながら、シベリアの酷寒、栄養失調等、ダワイ、ダワイの毎日でした。帰国して我々の考える事は戦争は絶対に御免だ。あくまでも平和な世の中を作り、若い生命を大陸の地に散華した戦友の分まで働かなくてはならない。

八十有余歳ともなれば記憶も薄らいで、忘れてた記憶を呼び戻すのは容易でなかった。思い出しながら書いたので相当な誤字記述があるかと思いますが、役立ったならば幸いと思っております。

入ソ後の経過

昭和二十年十一月二十日 ホルモリン地区第二

五四分所伐採切り出し作業

昭和二十年十二月三十一日 ホルモリン地区二

〇六分所(ガンドン)付近の道路作業

昭和二十一年一月十三日 ゴーリン二〇四分所

二〇九分所 二〇二分所 二〇五分所道路作

業

昭和二十二年一月十三日 ホルモリン地区三一

九分所製材(鉄道枕木)作業及び貯木

昭和二十三年一月七日 ホルモリン地区二〇六

分所第二バンム鉄道作業

同年十月二日 ヤマワリンスク二一七分所製造

作業、貯木及び枕木の運搬

昭和二十四年八月五日 コムソモール地区第七

分所建築及び貨車積込作業

昭和二十四年十月二十日 コムソモール第一第

二第三分所雑役 以上

昭和二十四年十二月八日 帰還のため 信濃丸
にて約千人帰還す

回想

栃木県 黒川 護

大正十三（一九二四）年八月二十九日 栃木県
下都賀郡大谷村（小山市）武井に十人兄弟の長男
として出生、家業は農業。

昭和十六（一九四一）年十二月、繰上げ卒業に
て茨城県立結城農業学校卒業。農業に従事。

昭和十九年十一月二十日、北支派遣陣第二九九
三部隊福富隊要員として宇都宮本部三十六部隊に
入隊。（六十三師団六十六旅団独立歩兵七十八大
隊機関銃中隊）一週間、列車にて現地に向う。中
国河北省保定駅下車、西方約三十キロの高陽県に
て一期の検閲。

出征当時の家族構成。私の上に姉が一人いたが、
前年の十八年に中国の華北交通に勤務していた夫
と結婚、すぐ下の弟はこの年栃木商業卒業と同時に
に軍属として既に南方へ出征していた。ここ一年